令和7年度（2025）活動計画自己評価の総合評価

1.外部評価を行なった運営懇話会委員

・半田 昌之　（公益財団法人日本博物館協会 専務理事）
・大国 正美　（神戸史学会 会長、神戸深江生活文化史料館 館長）
・甲斐 史子　（姫路文学館 副館長）
・坂本 竜之介　（神戸新聞社姫路本社 代表）
・堤　修　（兵庫県立歴史博物館友の会 会長）
・山内 敏男　（兵庫教育大学大学院 教授）
※ オブザーバー 服部 寛（兵庫県教育委員会文化財課長）

2.自己評価の総括

・「教育普及」「博物館連携」「広報活動」「参画と協働」「管理運営」についての達成状況は良好である。
・「調査研究」「博学連携」についてもまずまずの達成状況である。
・「展示」については、展覧会の入場者数の項目で目標達成ができなかった。第 2 期の策定の際に数値を見直す予定である。「資料の収集・保管・活用」については、昨年度同様、5年ベースで作業を進めている事も多いことから達成できていない項目もあったが、館蔵資料のオンライン公開に向けて準備が完了したことは成果であった。

3.外部評価の意見とその課題解決に向けて

①当館の事業全体についての意見・質問

1.展示	
（1）	a **1～2特別展、企画展**とも、地域研究成果の最新研究の反映や他機関との共同研究、地域研究成果の紹介といった視点からも質の高い水準であることが窺われ、県立の中核施設として充実した活動が維持・継続されていると思われ、研究成果を展示へ還元できている点で高く評価できる。自己評価においても、展示内容の意義、学術的位置付け、来館者アンケートの分析等を丁寧に実施しており、PDCAが有効に機能していると評価できる。
	b **1～2特別展・企画展**は特別、企画の4つとも、入館者の満足度が高いことを前向きに受け止めたい。一方で入館者数は目標に対し半分以下にとどまっていたという課題がある。満足度は「できた」、入館者数は「できなかった」と両極の評価が示され、取り組み全体として、どう評価されているのか。
	c **1～2特別展や企画展**において、近隣の自治体や施設との連携に積極的に取り組み、新たな成果を挙げられたことは意義深い。
	d **2企画展**のうち、「童謡と大正ロマン」展のレコード鑑賞コーナーは斬新であり、イヤホンの提供も含め手厚い試みであった。
	e **1～2特別展・企画展について、**年間入場者数の達成率が30.4%と低い水準にあり、自己評価では「できなかった」と分類されている。一方、広報活動の自己評価は「できた」となっており、これ以上入場者数を増やす手立ては広報面ではないと読み取れる。そこで、入場者数に対する分析をお聞きしたい。目標が高すぎるのか否かも含めてお願いしたい。

	f　1～2**特別展・企画展**について、展覧会の開催 基礎自治体とのさらなる連携が重要と考える。昨年度の懇話会において、童謡展の開催に際し、たつの市との連携について提案させていただいた。たつの市側の態勢の弱さや骨格が固まったあとでもあり、後援程度で十分な協力体制は取れなかったようだが、続く温泉巡りの展示では、協力体制がとられたと記載があり、喜ばしい。県立歴史博物館には展示内容の充実や入館者数の増加が求められる一方で、基礎自治体の博物館を取り巻く状況には大きな差があり、単独で事業運営ができている館もあれば、人材不足に悩んでいる館もある。メリハリある支援も期待したい。
	g　3**県内出張展示の継続実施**について、出張展示はコロナ禍での課題ではなかったか。ポストコロナ時代に、どのような目的で、何をするのか、それとも現時点では役割を終えたのか、整理が必要ではないか。大規模な出張展示は無理があり、特別展や企画展の期間中、その地域に関連する展示物を基礎自治体の博物館などで展示してもらい、特別展や企画展のピーアールに役立てるような発想は可能か。
回答	〈1〉 a･c:特別展・企画展の質の高さに対する評価 ・ 今後もアンケート等の分析を踏まえながら、展覧会の質を担保しつつ、充実した活動を行っていく。 ・ 展覧会における近隣施設からの協力の可能性について、今後、同じような企画の展覧会を開催する際には、ぜひ相談させていただき、連携を図りたい。
	〈2〉 b･e:展覧会入場者の低迷に対する分析 → ② 改善に向けての意見・質問にて回答
	〈3〉 d:企画展「童謡と大正ロマン」の特色ある取り組みについて高評価 ・ ほかの3つの展覧会でも、資料の展示に留まらない、大小さまざまな取り組みを行った。詳細については『館報』に記載している。
	〈4〉 f: 基礎自治体とのさらなる連携について ・ 指摘の通り昨年度は企画展「ひょうご温泉まちめぐり」で新温泉町などと連携した。 ・ 地元の姫路市とは、今年度の特別展「描かれたお城と城下町」で連携し、来年度の企画展「れきはくノスタルジーのりもの図鑑」でも連携予定である。 ・ 今後も展覧会の趣旨に沿った連携を行っていく。
	〈5〉 g: 県内出張展示の継続実施について、目的と具体策についての再検討 → ② 改善に向けての意見・質問にて回答
(2)	a　1～2**常設展**示における利用者のアクセシビリティの向上への取り組みは順調に進んでいるように思われる。障がい者、インバウンド対策等、予算の制約を踏まえつつも着実に進んでいる。
	b　1**常設展**の触れる資料、体験学習のできる資料の製作・公開の過程で、当事者の意見を聞いたことは良かった。
回答	〈1〉 a: 利用者のアクセシビリティの向上について高評価 〈2〉 b:　触れる資料、体験学習用資料の作成過程について高評価 ・ 触知資料や体験学習用の資料は令和8年度秋の企画展で披露する予定。 ・ 今後も当事者等の意見を聴取しながら、引き続き充実させていく。

2.教育普及	
(1)	a　1**アウトリーチによるシンポジウムの拡充**について、ひょうご歴史フォーラムは、再検討を必要としているが、当時のメンバーを講師に招いて、成果発表を続けることはできないか。
回答	**〈1〉 a:　ひょうご歴史文化フォーラムの内容についての意見** → ② 改善に向けての意見・質問にて回答
(2)	a　1**児童向けプログラムやユニバーサルイベント**は内容の充実が図られ、対象者に応じた工夫も見て取れる。また、教員研修や学校との連携については参加者から高い評価を得ており、教育機関とのネットワーク形成は着実に進んでいると思われる。 **→〔 関連 6博学連携 〕**

	b 「**児童・生徒向けの体験プログラム**」が 2025 年度も積極的に取り組まれたのは、歴博ファンを育て、将来の入館者増につなげる観点から、高く評価したい。
	c 「**児童・生徒向け体験プログラム**」について、達成率は開催回数でカウントし、人気イベントとしているが、参加者数が定員に達していないのではないか。評価の基準として適切なのか。
回答	〈1〉 a・b: 「児童・生徒向けの体験プログラムに対する高評価 ・ 今後も教育機関や大学との連携を通じて、歴博ファンを増やせるような質の高いイベントを開催していく。
	〈2〉 c: 「児童・生徒向けの体験プログラムの評価軸に対する質問・改善案 → ② 改善に向けての意見・質問にて回答

3.調査研究	
（1）	**a** 博物館機能の柱である**調査研究**については、質の高い活動が維持されており、所蔵資料の研究、紀要の刊行、地域史研究成果の公開等で成果が見られる。
	b 「**研究紀要**」への積極出稿が続いている。今後も学芸員の顔が見えるよう取り組んでほしい。
	c 「**研究紀要について**」、4本の論文のみの公開にとどまっているが、これは「塵界」の掲載論文すべてなのか。全文公開を原則にしてほしいが、何かネックがあるのか。神戸深江生活文化史料館では自館のホームページと、奈文研の「全国遺跡総覧」を活用して成果物の全文を公開しているが、そうした公開のリンクは使わないのか。
	d **2収蔵資料目録の刊行業務**が、「通常業務に追われ」できなかったようだ。前回会議で特別展、企画展の年 4 回開催は「過多」との意見が大勢だったが、展覧会に伴う繁忙も影響しているのだろうか。必要に応じた業務の見直し、効率化が求められているように思われる。
回答	〈1〉 a・b: 調査研究、研究紀要に対する高評価 ・ 博物館として取り組むべき調査研究は多岐にわたるが、今後も各学芸員がそれぞれの特色を生かした調査研究を行い、その成果を研究紀要として公表していく。
	〈2〉 c： 研究紀要の公開についての質問 ・ 研究紀要『塵界』では令和2年度（第 32 号）から全文 PDF 公開（計 32 本）を行っている。 ・ それ以前の原稿は、デジタル版公開は進んでいない。 ・ 「全国遺跡総覧」等のツールの活用については、担当者間で協議を行っている。 ・ なお、国立国会図書館デジタルコレクションでは、「国立国会図書館内/図書館・個人送信限定」で内容の閲覧が可能である。
	〈3〉 d: 収蔵資料目録の刊行業務についての質問 ・ 展覧会業務の過多が最大の要因である。業務の見直しを検討するとともに、逆に企画展等の準備に連動した収蔵資料目録の作成も検討したい。 ・ 今後の収蔵資料目録作成に向けたロードマップの作成が課題と考えている。
（2）	**a** 「**ひょうご歴史研究室研究成果の発信と活用**」について、「淡路名所図会」の公開は、研究室の時代に準備されたものであり、今後も続けてほしいが、マンパワーのない現時点で、どのようなことが可能か。
回答	〈1〉 a: ひょうご歴史研究室研究成果の発信についての質問 ・ 「淡路名所図会」のページは、研究室の調査成果や閉室以前に撮影されたデータを用いて、当館職員が独自に企画、構成を考案して作成したもの。昨年度以前に公開された「デジタルミュージアム」ページの大部分も同じである。 ・ ひょうご歴史研究室の研究成果は、WEB サイト上での発信や、それらを教材として用いた教育普及活動が考えられる。 ・ なお、昨年度の特別展「描かれたお城と城下町」では、活動によって培われた人脈や情報を活用した展示を一部行った。 ・ これまでの研究室の活動成果を踏まえ、現在の学芸員の調査研究とワンセットで、今後の展開を考えていく。

4.資料の収集・保管・活用	
(1)	a 1、2、4展示事業等との兼ね合いの中で、デジタルアーカイブ作りやデータのオンラインでの公開準備も進められている。 b **4オンラインでの収蔵資料の公開**について、れきはくサーチの一般公開の実現に拍手を送りたい。継続した登録作業に期待する。 c **4オンラインでの収蔵資料の公開**について、昨年のこの会で、当館の立ち遅れを指摘させていただいた。前向きに取り組んでおられるのは好ましい。 d **2データベースによる出納管理業務**が、「通常業務に追われ」できなかったようだ。前回会議で特別展、企画展の年 4 回開催は「過多」との意見が大勢だったが、展覧会に伴う繁忙も影響しているのではないか、必要に応じた業務の見直し、効率化が求められている。
回答	〈1〉a～c： オンラインでの収蔵資料の公開についての評価 ・ 一般への公開が遅れたものの、ようやく「れきはく Search」が公開できた。 ・ 少しずつでも公開点数を増やしていく。公開により得られた課題に対応し、改善していく。
	〈2〉d:データベースによる出納管理業務についての質問 ・ データベースのマニュアル作成ができなかったことが要因である。まずはマニュアル作成のための意見集約から始めていく。
(2)	a **2資料修復の実施**について、収蔵資料の修復は重要課題の一つであり、諦めることなくその必要性を訴え続けてもらいたい。 b **2資料修復の実施**について、予算の問題でできなかったのか。修復が必要な資料のリストアップや、修復見積もりは出しているのか。
回答	〈1〉a~b 資料修復の実施についての質問 ・ 修復のための予算が確保されていないことが要因である。引き続き、資料修復のため、民間補助金の利用も含め予算確保に努め、既存の修復リストに従って実施していく。

5.博物館連携	
(1)	a **1兵庫県博物館協会協力事業の充実**について、ワークショップ型のPRイベント「ひょうごミュージアムフェア」は来館動機にインパクトがあると感じた。来館者に学びの場として位置づけることのできるよい機会なのではないか。
回答	〈1〉a ひょうごミュージアムフェアについての意見 ・ ひょうごミュージアムフェアは当館を含め、参加館の周知と魅力を発信する好機と考えている。 ・ 今後も参加者が当館のリピーターにつながるような魅力あるワークショップの企画を考えていきたい。
(3)	a **1姫路城周辺の3館連携**について、もともとは神戸新聞社の働きかけで始まった連携だ。今後は展示での連携なども検討をしていただければありがたい。また共通割引券の販売などはできないか。
回答	〈1〉a: 展示における3館連携・共通割引券の発行についての提案 ・ 共通割引券の検討を3館で行ったことはあるが、各館の足並みが揃わず実現には至らなかった。 ・ 今年度は、姫路市立美術館の働きかけにより、3館の建築ツアーを企画している。 ・ この種のツアーは過去に2回行っており、今後も実施可能なものと考えている。 ・ 展覧会のような収益が上がるものではないが、城の北側エリアの魅力向上につながるものとして、今後も実施できればと考えている。

6.博学連携	
(1)	a **2教員研修プログラム「歴史博物館活用法」**は非常に人気がある講座となっている。先生方のニーズをふまえ、児童生徒の利活用につながり得る催しとなっている。
回答	〈1〉a: 「博物館活用法」の人気に対する評価

	・ 兵庫教育大学との連携協定に基づき、引き続いて良質な講座の運営にご協力をお願いしたい。

7.広報活動	
全般	a 広報活動への積極的な取り組みによる成果が具体に表れており、大きく改善している。1 新聞掲載数、Instagram フォロワー、ホームページ閲覧数の増加等は明確な成果であり、媒体ごとの特性を踏まえた運営が行われていると評価できる。
回答	〈1〉 a: 全般的な高評価について ・ 今後も、適切な広報活動を模索してまいりたい。
(1)	a **1報道機関への資料配布**について、資料提供だけでなく、記者に直接アプローチしたのは良いこと。他の行政機関や企業でもそういう職員や社員がいる。歴博の取り組み、存在意義を理解してもらうために、個々の記者とのコミュニケーションを深めてほしい。
	b **1報道機関への資料配布**について、神戸新聞社は別として、大手紙の地方の記者の削減が著しい。地方支局に記者がいない、広域兼務が当たり前になっている。大阪や東京本社の文化部・学芸部門へのアプローチはできているか。もしされていないのなら、一度訪問して展示資料を送ることも必要だと思う。 また、何が新発見なのかとか、どんな社会潮流を反映しているかとか、時代を反映している展示であることを訴えるなど、記者が書きたくなるようなリリースの仕方を心がけることが重要だ。
回答	〈1〉 a: 報道機関への資料配布に対する意見 ・ 報道機関の方々からのご指南、感謝する。大阪や東京本社の文化部・学芸部門へのアプローチはほとんどできていないため、訪問や展示資料を送る等の取り組みも検討したい。 ・ 効果的な広報手段、広報先については館内で検討を進めている。 ・ リリースの内容も「記者が書きたくなるような」手法を研究する。

8.参画と共働	
全般	a ボランティア・友の会の充実に向けた取組みは着実に実施され効果を挙げていると思われる。
回答	〈1〉 a: 友の会・ボランティア運営についての評価 → 今後も友の会・ボランティアの方々の意見を踏まえつつ、活動充実に向けて取り組みたい。
(1)	a 博物館があっての友の会であるため、友の会にできることがあれば、率直にご教示いただきたい。
	b **1～2友の会やボランティア**の登録、増加の人数だけが示されているが、減少もあるはずで、総計がわからないと達成度の評価にできないのではないか。総計が減少しているなら目標が低いということになるし、総計が増えているなら達成した、と評価できるのではないか。
回答	〈1〉 a: 友の会・ボランティア運営についての評価 ・ 友の会からは、当館の各種事業をはじめ、ボランティア活動などにも大変お世話になっている。 ・ 日頃の活動により得られたご経験や技術を博物館活動に還元いただいている点が心強い。 ・ 今後も、館内で企画する各種事業において、相談やアドバイスをお願いしたい。 ・ ただ、昨年度第 1 回目の運営懇話会でご発言があったとおり、ボランティア活動を無償の労働力という間違った方向にいかないように留意しながら、連携を進めさせていただきたい。
	〈2〉 b: 評価基準についての質問 ・ 達成度について評価指標は、第2期計画策定時に見直すこととしたい。 ・ 友の会の会員数は令和6年度の 402 人から令和7年度 388 人へと漸減している。 ・ ボランティア登録者数は令和6年度の 68 人から令和7年度 71 人へと漸増している。 ・ 令和7年度友の会会員のうち約 24%が新規加入者であった。 ・ 令和7年度ボランティア登録者のうち約 15%が新規登録者であった。 ・ いずれも新規会員が漸増している。 ・ これにより、友の会会員、ボランティア登録者の世代交代が進んでいるものとみられ、新規会員の継続と定着が進むかどうかが課題になると認識している。

	・ 令和7年度から開始した、中高生を対象としたユース会員の数は、増加傾向にある。 ・ 若い世代が博物館と関わりを持つ機会ともなっているため、この仕組みは今後も大切に育てて行きたい。

9.管理運営	
全般	a 運営予算が限られている中で、施設全体の維持管理、修繕、経費削減など管理運営に関する業務は適切に実施されていると思われる。学校団体アンケートの継続も評価できる。
回答	〈1〉 a: 管理運営全般に対する評価 ・ 今後も限られた予算のなかではあるが、適切な管理運営をすべく努力していきたい。

② 改善に向けての意見・質問

1.展示	
(1)	a 特別展・企画展とも入館者数は目標値の約 30～45%に留まっており、客観的に見て「どちらかといえばできた」と評価するのは第三者評価の観点からは妥当性に疑問が残る。定量的な目標や KPI に対する自己評価の基準には再考の必要性を感じる。集客不振については歴史コンテンツの受容状況など外部要因の分析がなされているが、他分野の学芸員間の連携促進やターゲット設定、展示構成など館として改善可能な要因についてさらに踏み込んだ分析が望まれる。
回答	〈1〉 a: 展覧会入館者数の改善に向けての質問・意見 (①における質問も含めて回答) ・ 令和5年度策定時、入館者数は、コロナ禍前の最高水準を目指して、特別展 2.5 万人／回、企画展 1.5 万人／回と設定したものの、策定以降に目標値を上回った展覧会は現状存在しない。 <参考>R1:(特)五大浮世絵師:27,059 人のみ数値目標を上回る。(コロナ禍前) R5:(特)海洋堂と博物館:18,689 人が策定以降の最多記録。 ・ 入場者数はコロナ禍以前の水準に回復しておらず、第2期計画の策定時には、数値目標を実態に合わせて、現実的な数値に修正する必要がある。 ・ 令和6年度の評価の際には、入館者数に関して定量的に判断しなければならないところ、職員による定性的な判断が加味されている。 ・ 第2期目標の際には、定性的な評価指標を設けるなど、評価の在り方を検討して行く。 ・ 入場者の満足度は高い水準にあるが、充実した展覧会の内容を、いかに魅力的に広報できるかというところが課題と認識している。
	〈2〉 ①〈5〉g: 県内出張展示の継続実施について、目的と具体策についての再検討 g **3県内出張展示の継続実施**について、出張展示はコロナ禍での課題ではなかったか。ポストコロナ時代に、どのような目的で、何をするのか、それとも現時点では役割を終えたのか、整理が必要である。大規模な出張展示は無理があり、特別展や企画展の期間中、その地域に関連する展示物を基礎自治体の博物館などで展示してもらい、特別展や企画展の PR に役立てるような発想は可能か。 ・ 大規模改修工事による休館期間(R3～4)中に実施した巡回展“ひょうご五国”歴史文化キャラバン」の成果をもとに、継続してきたものである。 ・ 通常年度事業の中でのこのような事業は、予算と人員の両面で無理がある。 ・ 令和8年度からは各地の博物館等の要請に応じ、ソフト面で展示協力を行うこととしている。 ・ 現在、県立図書館において、展覧会のPRや館蔵資料の紹介などを行う機会を得ている。 ・ 基礎自治体からの要請があれば、そちらへの展開も検討して行きたい。
(2)	a **2-3音声ガイドの拡充**について、自動翻訳機能を備えた無料ガイドアプリ“ブルームバーグ・コネクツ”がある。日本での参加施設はまだ少なく、運営サイドもその拡充を目指していると聞く。具体的な導入、開発、更新方法等の調査を要するが(導入費用は無料)、検討してみてはどうか。
回答	・ 情報収集を進めるとともに、インバウンド、インクルーシブの観点から有益なものかどうかを見極めたい。

2.教育普及	
(1)	a 取り組み内容は評価できる一方で、今後の課題としては、目標値を下回っている学校団体利用数及び利用人数の増加に向けて、学校訪問の拡充や教員向けの広報、リピーター校の割合や学校側のニーズ調査等を指標として取り組み、改善状況を可視化することを検討する必要がある。 **→〔 関連:6博学連携の指摘〕**
回答	〈1〉 ①〈1〉a: ひょうご歴史文化フォーラムの内容についての意見 a **1アウトリーチによるシンポジウムの拡充**について、ひょうご歴史フォーラムは再検討が必要としているが、当時のメンバーを講師に招いて成果発表を続けることはできないか。 ・ R8 年度は、「西播磨のたたら製鉄」をテーマとしたアウトリーチ型のシンポジウムを計画しており、旧たたら製鉄研究班のメンバーを講師に招く予定。

	〈2〉 ①〈2〉c: 児童・生徒向けの体験プログラムの評価軸に対する質問・改善案 **c 1児童・生徒向け体験プログラム**について、達成率は開催回数でカウントし、人気イベントとしているが、参加者数が定員に達していないのではないか。評価の基準として適切なのか。 ・ これらのプログラムは第1期目標開始時に始めたものであり、継続することを課題と認識したため、開催回数を指標にした。いずれも参加者からは好評で、充実した内容との評価を得ている。特に「れきし博士スクール」は参加者数こそ少ないが、館蔵資料に触れられる講座であり、博物館だからこそ実施できるものである。実施に向けて手間はかかるが、博物館の特色をフルに活かした行事であり、なおかつ児童生徒の来館を促す目的もあるため、実施することに意義を感じている。今後は広報手法を見直し、更なる参加者獲得に努めていく。
	〈2〉 a: 目標値を下回っている学校団体利用数及び利用人数の増加に向けた展開について ・ 目標値は県立考古博物館並みに設定したが、現実にはその水準に達しなかった。 ・ 教員セミナー開催などの対策を行ったが、目標達成には至らなかった。 ・ 学校団体の利用が増えない状況について、当館としては危機感を抱いている。 ・ 学校団体を取り込む方策について、館全体で取り組む必要があると認識している。 ・ 学校団体に対するアンケートのデータにより対策を講じ、リピーター校の確保に努めたい。

4. 資料の収集・保管・活用	
（1）	**a** 近隣博物館への収蔵品の貸出に際し、資料の種類や状態を問わず美専車による運搬が必須であるのかどうか。
回答	〈1〉 a: 収蔵品の貸出に際し、資料の種類や状態を問わず美専車による運搬が必須であるか ・ 博物館資料の公開と保存の両立を図る観点から、専門的技能に関する資格を有する作業員による作業と、美術品専用車による輸送が原則であると考えている。その一方で近隣博物館同士での資料の貸借に際しては、柔軟な対応が可能な場合があるとも認識している。具体的な運用の基準については、もう少し研究させていただきたい。

6. 博学連携	
（1）	**a** 児童生徒来館の促進に関して「授業に関連した展示を求める声が多い」点について、現在中央教育審議会教育課程部会学習指導要領改訂に向けたワーキンググループにて「地域調査の充実」が課題としてあげられている。具体的には中学校において地理・歴史・公民の分野横断が求められ、地域を題材とした学習活動（地域調査を含む）が直接体験を生み出すことで、よりよい学びを促す方法となることを例示したり、具体的な手法を例示したりすることにより、教員が取り組みやすくすることを検討している。これまでの歴史の展示に加え、地図に落とし込む（図を追加する）などの工夫（既にされている姫路城に関わる展示等）を PR することにより、授業に関連した展示として当てはまっていくことが期待できる。遡求効果を貴館から紹介するのも効果的である。 **→〔 関連:1展示（2） 〕** ◆参考：令和8年 2 月 27 日社会・地理歴史・公民ワーキンググループ資料1、p.51 （https://www.mext.go.jp/content/20260227-mxt_kyoiku01-000047682_03.pdf）
	b アーカイブ利用についても促進することが議論されており、積極的な紹介を行うこと（各学校に利用を促進するリーフレット作成等）で学校教育にてより使っていただけるものになるのではないか。 **→〔 関連:4資料の収集・保管・活用 〕**
回答	〈1〉 a~b: 児童生徒来館の促進・アーカイブ利用についての提案 ・ 学校教育現場のニーズについて情報収集につとめ、各学校に対して積極的に PR していきたい。

7.広報活動	
(2)	a SNS 等による情報発信の基盤が充実しつつある状況を、実際の来館者数の増加に繋げるコンテンツの充実等が課題と思われる。自力で専門人材の活用は難しいと思われるが、文化庁の専門人材派遣に係る補助金事業等の活用も視野に、戦略の検討が必要と思われる。
回答	〈1〉 a:　児童生徒来館の促進・アーカイブ利用についての提案 ・ 引き続き、各種補助金や制度について情報収集につとめ、広報戦略について検討する。

8.参画と共働	
(1)	a　博物館の集客増については、友の会で直接的な取組は行っていないが、間接的に下記のような取り組みを通じて集客増に貢献したいと考えている。 (1)友の会会員の増強 会員自らが新たな会員を獲得することであり、組織の強化と同時に集客に結び付くと考える。 (2)魅力ある友の会づくり 友の会は「楽しく学び、交流できる」ことを目標としており、会員が「楽しい」と思ってくれるような活動により、会員の輪を広げたいと考えている。 参加型の活動は、ボランティア活動、自主研究活動があり、6分野のボランティア活動のうち、イベントボランティアは館の支援の下で自主運営しており、子どもと保護者を通じて博物館へのリピーター確保と集客努力を行っている。自主研究活動は、昨年秋に3つの研究会が発足した。それぞれ希望者が集い、テーマを決めて30余名の会員が学びながら交流の輪を広げている。 (3)新たな広報活動の検討 友の会役員へ、ポスター・チラシを知り合いへ配布・近所へのポスティングを依頼する。 (4)ミュージアムフェア、れきはく感謝祭への応援 いずれも外向けのPRの観点でも大切なことだ。友の会へも可能な限り会員の参加・応援を呼び掛けたいと考えている。 (5)ホスピタリティの向上 来館者に対するホスピタリティは、リピーターの獲得、来館者を通じて伝わる博物館への評価等の点で軽視できない。特に、来館者に接する機会の多い「ごあんないボランティア」については改善が進んでいるものの、ホスピタリティの観点も含め、より充実した研修を実施してはどうか。各所に配置されている受付者についても同様のことが言えるのではないか。
回答	〈1〉 a　集客増に向けた友の会の提案 ・ 配慮に感謝したい。引き続き友の会とは連携していきたい。

9.管理運営	
(2)	b **l来館者アンケート**について。そもそも、どういう層が歴博を訪れているのを知りたい。入館者の年齢層、居住地、歴史ファンなのか美術ファンなのかといった志向（嗜好）―など。展覧会ごとに入館者アンケートを実施しているのなら、結果を知りたい。2025 年度は全来館者対象の動向調査は未実施とのことだが、ぜひ実現してほしい。見学者を増やすヒントが見つかるかも知れない。
回答	〈1〉 a　館活動の満足度調査や利用動向調査についての提案 ・ 今年度からは、年間を通じた学校団体に対するアンケート調査を行うようにしている。 ・ これまでも展覧会や各種イベントに対するアンケートを採ってきたものの、日常的な来館者や非来館者も含めたアンケートは採っていない。 ・ こうした調査の実施の手法について研究していく。
	〈2〉 b 来館者の傾向についての質問 ・ 年齢構成は 50 代（23.7%）、60 代（22.5%）、40 代（18.0%）の順に多い。10 代の利用が少なく（1.3%）、なかでも中高生の割合が少ない。

	・ 地域ごとにみれば、播磨が過半数以上で、そのうち 34.8%が姫路市内。神戸・阪神地域が 19.5%、県外が 20.2%で、観光客層も一定みられるようだ。 ・ 来館者としては、はじめて来館する割合が半数(50.2%)、リピーター層も一定存在する。 ・ 〈1〉で指摘があった通り、日常的な来館者や非来館者も含めたアンケートの重要性については認識した。その実施手法については、他館の先行事例の情報を収集し精査したい。

※ 使命達成のための活動計画および評価全般	
(1)	a 特に項目建てがないが、基礎自治体の博物館等との連携強化を項目建てに加えることはできないか。 b すでに業務量が多いなか、目標値が現実的に達成可能な設定であるのかが気になる。たとえば、**6博学連携活動**(学校団体の受入や学校へのアウトリーチなど)については、学校現場の事情やニーズも踏まえて見直す(引き下げる)ことはできないのか。
回答	〈1〉 a 基礎自治体の博物館等との連携強化の項目建てについての提案 ・ 県域の基礎自治体の博物館との連携については、第2期目標設定に向けて重要性を精査する。 〈2〉 b 目標値が現実的に達成可能な設定に変更することについての意見 ・ 第1期計画は同じ目標、評価軸で評価を行い、そこで得られた成果や課題をもとに第2期計画において目標設定を調整したい。

その他	
(1)	a 改正博物館法のもと、博物館は今後自治体を含め幅広い交流が必要かと思う。現状は、博物館協会だけでなく、例えば日本遺産においては銀の馬車道など、行政が連携を維持しているところもあるが、さらなる連携が可能な事例も他にある。兵庫県は他府県に比べ博物館・学芸員の連携が活発でない地域と言われていると聞いた。県域が広いこともある。基礎自治体の施設は地域差が大きいと感じている。どこもぎりぎりで運営しているところが多く慢性的な人員不足という点が大きいとは思う。その中でも西播磨では県立歴史博物館の展示にあわせて近世絵画を数点展示し、スタンプラリーのようなものをしたり、基礎自治体の展示に県立歴史博物館の学芸員が展示解説をしたりという例もある。県博の展示+現地ツアーのようなものがあれば、その時は現地の人が案内。その調整役を地域の博物館がするなどが考えらえる。このような企画・事業は学芸員同志の交流から生まれてくる企画が多いと思われる。 b 若い学芸員の採用が増えている印象で、学芸員同士の(専門分野にかかわらない)交流機会を増やす仕掛けが重要だ。可能であれば県博物館協会の事業として、地域の核になるような博物館に協力を得て、概ね採用 10 年以内の若手学芸員を対象とした交流・研修・意見交換を行い、研修場所は 播磨・丹波・・など 5 国の地域と博物館を巡るような事業ができないか。一度に全部でやるのは大変なので、モデルケースとして一度やってみて、事例報告などをするのはどうか。 c 博物館がない、もしくは小規模な博物館しかなく、地域に専門員がいない、少ないところをどうするかはもっと大きな課題。しかし何かしらの歴史・民俗関係の展示施設は、常駐の人はいなくても基礎自治体は大抵もっているし、民間の博物館もある。県立歴史博物館がなんらかのアプローチをすることができれば、地域のアイデンティティの復活・再発見に影響を与えると思う。
回答	・ 資料収集、調査研究、展示や教育普及事業といった博物館の基本的な事業の実施に際しては、各館の学芸員同士の連携が必須であり、今後も業務遂行の中だけではなく、研修などの機会を設け、連携強化に向けた対応をしていきたい。 ・ このような交流は各担当者が互いに知り合うことからスタートすべきと考えている。 ・ そのような機会の創出には、当館に事務局を置く兵庫県博物館協会としても、これまで以上に力を入れて取り組もうとしているところである。